

『バルザス＝ブレイス』の受容をめぐる一考察 —フランスにおける18世紀後半から19世紀の民謡の位置づけ—

大場 静枝

A Study on the Changing Perceptions of *Barzaz-Breiz*: Position of Folksongs in France from the Late Eighteenth Century to the Nineteenth Century

Shizue OBA

Théodore-Claude-Henri Hersart de La Villemarqué published *Barzaz-Breiz. Chants populaires de la Bretagne* in 1839. Since Romanticism was in the mainstream of the French literary world at that time, this collection was immediately received with enthusiasm and highly regarded as a literary work.

The process of collecting folktales and ballads gave birth to a new subject of scientific research: “folklore”. In such circumstances, the “controversy of *Barzaz-Breiz*” occurred over the authenticity of the folksongs collected and edited by La Villemarqué. As a result, within less than 30 years his collection was no longer spoken of in the French literary world. Looking at the progression of this controversy from today's perspective, one mysterious phenomenon is evident: there has been no attempt to discuss literary aspects of this work from the eruption of the “controversy of *Barzaz-Breiz*” to the present.

The purpose of this paper is to elucidate, by considering French literary trends from the late eighteenth century to the nineteenth century, the issue of “the controversy of *Barzaz-Breiz*” and the change in perception of the work from literature to folklore, the position of folksongs in the French literary world, and the literary meaning of *Barzaz-Breiz* at that time.

- I. はじめに
- II. 民衆詩『オシアン』と啓蒙思想
 - 1. ゲール語の古歌『オシアン』
 - 2. 啓蒙思想下の『オシアン』
- III. フランス・ロマン主義と「異国」ブルターニュ
- IV. 『バルザス＝ブレイス』の誕生と文学的成功
 - 1. 『バルザス＝ブレイス』の誕生の経緯
 - 2. 『バルザス＝ブレイス』の文学的成功
- V. 「バルザス＝ブレイス論争」とその後
 - 1. 「バルザス＝ブレイス論争」の争点
 - 2. 19世紀における民衆歌の位置づけ
- VI. おわりに

I. はじめに

テオドール＝クロード＝アンリ・エルサール・ド・ラヴィルマルケ（1815-1895）が、『バルザス＝ブレイス＝ブルターニュの民謡』（以下、『バルザス＝ブレイス』と略記）を発表したのは、1839年、フランス文学界ではロマン主義が主流となっていた時期であった。この民謡集は出版されるとすぐさま成功を収め、時をおかず英語やドイツ語、ポーランド語に翻訳出版され、ヨーロッパの国々に広まっていっ

た¹。この時、『バルザス＝ブレイス』は単なる収集された民謡集という扱いにとどまらず、ヨーロッパにその名を知られる文学作品として評価された。

しかしながら、民話や民謡の収集が学問の一つになっていく過程で、民間伝承もまたいつしか文学ではなく、民俗学という新たな学問の対象となっていた。そのような時代の流れの中で、『バルザス＝ブレイス』の真贋をめぐる論争が引き起こされ

た。その結果、作品の価値が著しく損なわれ、『バルザス＝ブレイス』はブルターニュ地方を除き人々の記憶から消えていった。

しかし、この論争の過程を今日の視点から眺めると、そこには一つの不可解な現象が見られる。それは、論争の焦点が常に『バルザス＝ブレイス』に取められた民謡が本当に民衆から採集されたものであるのか、民謡が作られた年代の推定が歴史学的に正しいのか、など民謡の民俗学的、歴史学的な真正を論じることに終始し、この作品の文学的な側面を論じようとする動きがほとんどなかったことである。「バルザス＝ブレイス論争」が引き起こされたのは第三版が刊行された1867年であったが、それまでロマン派の文人や詩人によって評価された、民衆詩の持つ素朴な抒情という本作品の文学的な側面は無視され、この論争はかつて民謡の信憑性をめぐって、イギリスで引き起こされた「オシアン論争」さながらの様相を呈したのである。

本論文の目的は、『バルザス＝ブレイス』を一つの文学作品としてみた時、なぜわずか30年に満たない間にその受容が文学から民俗学へと変わってしまったのかという疑問を出発点に、18世紀後半から19世紀の文学的潮流や「バルザス＝ブレイス論争」の争点、『バルザス＝ブレイス』の評価の変遷を考察し、当時の文学世界における民謡の位置づけを解明することである。

Ⅱ. 民衆詩『オシアン』と啓蒙思想

1. ゲール語の古歌『オシアン』

『バルザス＝ブレイス』は、その副題が示す通り、ブルターニュ地方で収集された民衆詩を集めた歌謡集である。この作品の受容を考察しようとする時、これがケルト民族の民衆詩であるがゆえに、避けて通ることのできないもう一つの受容の問題がある。それは、1760年から1765年までスコットランドの詩人ジェイムズ・マクファーソン(1736-1796)によって段階的に発表され、1773年に決定版が刊行された『オシアンの詩』²⁾(以下、『オシアン』と略記)のフランスにおける受容である。『バルザス＝ブレイス』は、フランスにおいてケルト文化圏の民謡を初めてフランス文学界に紹介し大きな反響を呼んだ作品であり、その後、真贋をめぐる論争の的となった点からも、『オシアン』に類似する作品だと言える。

ここでフランスにおける『オシアン』の受容とその影響を考察することは、当時のフランス文学界と『バルザス＝ブレイス』の関係を考える上で一つの重要な手掛かりになると思われるので、まずは『オシアン』のフランスにおける受容について考察したい。

『オシアン』とは、民衆が歌い継いできたゲール語の古詩を英語に翻訳したもので、荒涼とした景色の中で一族の過去を追憶し、戦に斃れた戦士たちを悼む抒情的な叙事詩である。人間の生死もまた自然の営みの一つと捉えて、その変転する様を詩の中に情感豊かに織り込んでいく表現のあり様は、従来の古典主義や教条主義の詩には見られなかった新しい表現形式を生み出し、大きく評価された。『オシアン』は、当時のヨーロッパの文学界において、後に「オシアニズム」と呼ばれることになる前ロマン主義的な文芸運動を作り出した作品であった。

『オシアン』は、その前身である『古詩断章』(1760)の出版直後から、イギリスのみならず広くヨーロッパで大成功を収めた。例えばドイツでは、若きゲーテ(1749-1832)やヘルダー(1744-1803)がその深い賛美者であったことは一般によく知られている³⁾。しかしながらその後、この作品に対して採録された民衆詩が正真正銘の古詩ではなく、マクファーソンの創作であるとする見解が示され、それが真贋論争にまで発展する。これをマクファーソンの創作だとする根拠の一つは、同時代の詩人で批評家のサミュエル・ジョンソン(1709-1784)がゲール語は話されるだけで書かれたこのない言語である、あるいはゲール語の古記録など存在しない、と主張したからである。さらに、異なるサイクル⁴⁾に属するはずの詩篇が混同されているという点からも、マクファーソンが主張するゲール語の原資料からの忠実な翻訳ではない、と判断された。

マクファーソンが主張したゲール語の古記録は、現在に至るまで発見されていない。しかしながらその後、ゲール語で書かれた別の原資料や断片の採集が進み、スコットランドにオシアンの古詩は存在しなかったという説は否定されている。したがって、現在では『オシアン』は「マクファーソンの捏造」とまでは言えないが、スコットランドの古詩を下敷きにマクファーソンが創作した文芸作品として扱われている。

2. 啓蒙思想下の『オシアン』

『オシアン』がフランスに紹介されたのは、比較的早い時期であった。以下、ポール・ヴァン・ティーゲム (1917: 103-146) の詳細な研究に沿って、『オシアン』がフランスに紹介された経緯を見てみよう。

『古詩断章』が出版されたその年のうちに、二編が重農主義経済学者であり政治家でもあったジャック・テュルゴー (1727-1781) によって翻訳され、短い解説文とともに『ジュルナル・エトランジェ』誌の9月号で初めてフランスに紹介された。この時、テュルゴーは詩集のタイトルもマクファーソンの名前も言及していない。そもそもこの記事自体が匿名であった。その後、同誌の記者であったジャン＝バティスト＝アントワヌ・シュアール (1732-1817) が1761年の12月号に記事を掲載し、『古詩断章』の詩編のいくつかを翻訳したことで、初めてマクファーソンの名前と作品の真贋に対する疑義が明らかにされた⁵。また、同時期にデイドロ (1713-1784) もグリム (1723-1807) の『文芸通信』の中で『古詩断章』の詩の一編を翻訳し寄稿した。その後、1777年のピエール・ル・トゥルヌール (1737-1788) による全訳の出版をきっかけに、『オシアン』の詩篇が広くフランスで知られることになる。

しかしながら、『オシアン』がフランス文学に与えた影響は、ヨーロッパの他の国々に比べてそれほど大きなものではなかった。この点について、百科全書派の反応とルソー作品との重層化の問題を検討することで、その原因の一端を考えてみたい。フランスではこの時期、啓蒙思想が全盛期にあり、ヴォルテール⁶ (1694-1778) のように強い影響力を持つ啓蒙思想家たちが『オシアン』のスタイルを批判し、揶揄する立場をとったことがその理由の一つに挙げられる。以下に一例として、『ジュルナル・アンシクロペディック』誌 (1763年4月1日号)⁷に掲載された批評の一節を紹介しよう。

デブレオーが生前、耳障りなオシアンの詩やルーン詩のもつ常軌を逸した偽りの表象、そして重い病にでも罹っていない限り退屈しないではいられないこれらの〔詩が描き出す〕情景の暗くてぎこちない色調を人々が褒め称えるのを聞いたなら、大いに笑ったことだろう。

(*Journal Encyclopédique* le 1^{er} avril 1763 : 133-134)

ヴァン・ティーゲム (1917: 176) は、1760年から1775年の間、つまり『オシアン』がフランスに紹介された時期において、一部に「本物の詩とはプリミティヴな詩である」(ヴァン・ティーゲム 1917: 113) という考え方があったにしても、フランス詩ははまだ古典主義を基本としていたと指摘している。こうした文学的状況、つまり古典主義重視の風潮をラヴィルマルケ (1836: 167) も厳しく批判し、「ヴォルテール派の文学にはルイ14世の時代の文学の欠点がすべて存在し、そこに美しさはない」と切り捨てている。

さらに啓蒙主義時代のフランスには、一言で言えば、理性や合理性、科学技術の進歩を重視する反面、超自然的な事象や迷信を唾棄し、民間伝承までも否定する風潮があった。ロマン派の作家として高名なジョルジュ・サンド (1804-1876) は、この点について次のように非難している。

ドイツは幻想文学の伝統的な土地柄だとみなされています。それは古今の作家が詩歌や物語、物語詩の中に民間伝承を定着させたからです。私たちのフランス文学は、とりわけルイ14世の時代から、民間伝承を人間の理性や哲学の尊厳にふさわしくないとみなして拒絶してきました。(Sand 1980: 205)

このように啓蒙主義や古典主義が重んじられていた当時のフランスでは、『オシアン』の影響が限定的であったと仮定しても差支えないだろう。

もちろんその一方で、『オシアン』がフランスの一部の知識人の中で支持を得たこともまた、紛れもない事実である⁸。しかしながら、その支持は諸外国のように、すぐさま文芸運動やナショナリズムの動きに結びつくものではなかった。というのも、そこには『オシアン』とルソー作品の重層化という問題があったと考えられるからである。フランスでは『古詩断章』が翻訳されたその翌年に、ジャン＝ジャック・ルソー (1712-1778) のベストセラー小説『新エロイズ』(1761)が刊行されている。

ヴァン・ティーゲム (1917: 217-219) は、オシアンの風景描写とルソーが描き出すアルカディアとの類似をことさらに強調することに対して警鐘を鳴らしつつも、「テュルゴーが着手し、シュアールが継続した発見の書〔『オシアン』〕やロンドンの『カ

ルトン』及びディドロの『スコットランドの詩』とルソーの三つの作品との間には、反論の余地のない暗合が存在する」と指摘する。この点を踏まえると、ロマン主義が醸成されつつあった時代において、『新エロイズ』が描き出す自然に対するある種の憧憬、人間の絶対的な孤独感、主観性と抒情性の美といったものと、『オシアン』の自然描写と人間の哀愁を表現した詩的な感性との間には、間違いなく重なりあうものがあったと言ってもよいだろう。

1777年に『オシアン』の全訳が出版されるまで、その存在が一般には知られていなかったことを考慮すると、フランスにおいて『オシアン』の詩情、ひいてはロマン主義の感性を受け入れる土壌を整えたのは、むしろルソーの『新エロイズ』ではないだろうか。そうであれば、ヨーロッパのロマン主義運動の成立に際して、『オシアン』の詩的な感性が人間の感情や感受性に重きをおく新たな文学の誕生に貢献したことが事実だったとしても、フランスにおいてはその影響は極めて限定的であったと考えても差支えないだろう。

以上、フランスにおける『オシアン』の受容を通して、18世紀後半のフランス文学の潮流を概観したが、この時代のフランスにおいては『オシアン』の影響が諸外国ほどに大きな意味を持っていなかった。それゆえにこそ、フランス文学界においては「オシアニズム」と呼ばれる汎ヨーロッパ的な文芸運動が大きく展開されることがなかったのである。その当然の帰結として、フランスでは他のヨーロッパ諸国のように、すぐには古歌や民間伝承の類を収集するという気運も起こらなかった。この点については、前述したように啓蒙主義時代の民謡や民間伝承に対する関心の低さもまたその原因の一つとして考えられるが、ここで留意しておきたいのは、常にフランス文学の底流には民間伝承に対する偏見や不当な評価があったということである。

Ⅲ. フランス・ロマン主義と異国「ブルターニュ」

次に、『バルザス＝ブレイス』の初版の成功の背景にある、ロマン主義とブルターニュの関係について検討しよう。社会に未曾有の混乱を引き起こしたフランス大革命を経て、文学の潮流もまた一変する。理性や悟性を尊重する啓蒙主義や形式美を重んずる古典主義に代わって感性が優位に立つ時代、いわゆ

るロマン主義の時代が到来したのである。

文学におけるフランス・ロマン主義の特徴は、一般に自我の解放、理想への渴望、その理想の挫折と革命に対する幻滅、現実逃避の欲求、神秘主義への傾倒などが挙げられるが、逃避欲求の一つの形として異国趣味や中世趣味があった。この点で言えば、かつて異国であったブルターニュやこの地方に伝わる古代のケルトの詩歌は、まさにロマン主義時代の感性に合致していたと言ってもいいだろう。古代の伝説を素材とした哀愁的な詩情や、美の相対性としての地方色、自然描写から発展した飾らない感情表現が多く作家の心の琴線に触れ、人々は「異国情緒」や「キリスト教以前の土着的な豊かさ」を求めてケルトの古歌に注目した。

こうした動きと軌を一にするように、ブルターニュに対して人々がそれまで抱いてきた、陰鬱で貧しい地域という先入観や「反革命の地」という血なまぐさいイメージが薄れ、この地方への興味や関心がより大きく、より好意的になっていった¹⁰。イメージの転換に大きな役割を果たしたのがシャトブリアン(1768-1848)やオーギュスト・ブリズー(1803-1858)、エミール・スーヴェストル(1806-1854)らブルターニュ出身の作家たちであり、故郷ブルターニュへの愛と郷愁を表現した彼らの作品であった。

例えば、スーヴェストルは『最後のブルターニュ人』(1836)の中で、故郷の美しさを感動的な筆致で描き出している。失望や幻滅の多い大都会の生活に倦み疲れ、自然豊かなブルターニュを懐かしく思い始めたスーヴェストルが、ある日、衝動にかられて故郷へと旅立ち、そこで心身の疲れを癒した時のくぐりを見てみよう。

その時、人生を活気づかせ彩りを与える、こうした精神の回復期の一つが私に始まった。春が訪れようとしていた。ブルターニュはいささかの汚れもない美しさで、私の前に現れた。私は鬱蒼とした山中の小道に入り込み、その巨大なメンヒルに囲まれて座ろうとした。そして私は、その内面の恍惚のうちに花開いたばかりの世界を眺める喜びを知った原始人が感じたにちがいない何かを感じ取った。この自然の中にある詩的で清新なものすべてが、私の心を打った。(Souvestre 1866 : 14)

ブルターニュでスーヴェストルが見出したものは、あらゆるものが再生し命を吹き返す春の訪れと、汚れない美しさをみせる故郷の姿であった。

ラヴィルマルケもまた若い頃、「黒山岳にて」と題するエッセイの中で、故郷の美しさを同様の筆致で描写している。

そこにあるのは、高く積み上げられた豊かな作物に覆われた畑、青々としたピロードのような牧草地、若い樫の木に縁取られ、柳が垂れ下がった広くて澄んだ小川だけだ。(中略) 太陽が霧に穴を開け地平線に輝きを差し込ませるのは、ようやく11時になってからだ。その時、山々は荘厳ながら、荒削りの美しさとともに姿を現わすのだ。(La Villemarqué 1837 : 229)

フランスの一部でありながら言語も風俗習慣も異なるブルターニュは、ロマン主義の息吹の中でまさにエキゾチズムを体現する「異国」として、人々の目に映った。この時、フランスにとってブルターニュは、いわばイギリスにとって『オシアン』を生み出したスコットランドのようなものであり、「再生と灵感の豊かな源泉」(Laurent 1997 : 335) を秘めた土地となったのである。

IV. 『バルザス＝ブレイス』の誕生と文学的成功

1. 『バルザス＝ブレイス』誕生の経緯

以上のような文学的背景の中で、1839年、『バルザス＝ブレイス』が発表された。『バルザス＝ブレイス』は、ラヴィルマルケの生前中に三版が公刊され、刊行年はそれぞれ1839年、1845年、1867年である¹¹。ラヴィルマルケが、自身の代表作となるこの作品を世に送り出したのは、奇しくもジェームズ・マクファーソンが『古詩断章』を出版した年齢と同じ24歳だった。では、そもそも若きラヴィルマルケはどういった経緯で民謡の収集を行い、この作品を編むに至ったのだろうか。

ラヴィルマルケは、ブルターニュの古歌の魅力を彼に伝えたのは母親だったと述懐している。彼は、母親が古歌の収集を始めたそのきっかけを『バルザス＝ブレイス』第三版の序文で詳らかにしている。

お母さん、息子に免じてこうして母の名を呼

ぶことをお許しください。私の母は不幸な者たちの母親でもあり、メルヴァン小教区の憐れな旅回りの歌手の健康を回復させてやったことがあります。歌よりほか返すものなどないのに、何とか母に礼をしたいと望んでいるその貧しい女の残念そうな様子に心を動かされた母は、彼女に歌を一つ所望しました。そして母はそのブルターニュの詩の独特な調子に感動したので、それ以来しばしば、この不幸な者からの心にしみる謝礼を受け取るようになりました。

(La Villemarqué 1963 : 5)

長じて、母親の収集を受け継ぐ形で古歌の採集を始めたラヴィルマルケは、何年もかけてそれを編纂し『バルザス＝ブレイス』を出版した。彼は、孝行心からこの作品を編んだと言って上記のエピソードを締めくくっているが、もちろんそれだけが理由ではない。そこには、より個人的な理由もあったと考えられる。それは一言で言うと、ラヴィルマルケの文学的な野心であった。

文学における彼の野心は、19歳でパリに上京後、早々に雑誌『エコー・ド・ラ・ジュンヌ・フランス』に参加していたことから窺い知ることができる¹²。「若きフランスのこだま」という意味を持つ『エコー・ド・ラ・ジュンヌ・フランス』誌は、正統王朝派の団体「エコー・ド・ラ・ジュンヌ・フランス」の機関誌で1833年に創刊された。この月二回の定期刊行物¹³はロマン主義を支持する者たちの雑誌でもあり、寄稿者にはシャトブリアン、バルザック(1799-1850)、ゴビノー(1816-1882)など有名な作家たちも名を連ねていた。ラヴィルマルケは1836年から1837年の間、この雑誌に積極的に寄稿して文人としての地歩を固めようとした。そしてその原稿の中にはすでに、ブルターニュの民謡や民間伝承に関するものがいくつも含まれていた。

このようにラヴィルマルケは十代の頃から文学、とりわけブルターニュ文学に傾倒し¹⁴、いずれは郷土の文人としてフランス文学やヨーロッパ文学に対するブルターニュ文学の功績を証明し、それを世に問いたいという大望を抱いていた。彼のこの大望は、『バルザス＝ブレイス』の初版と第二版に記された刊行の意義からもしっかりと読み取ることができる。諸外国では、民謡集が次々と出版され、グリム兄弟(ヤーコブ 1785-1863, ウィルヘルム 1786-1859)や

ヘルダー、ウォルター・スコット (1771-1832) らが輩出しているのに、フランスには民謡集もなく、ましてや収集家もいないことを指摘した上で、次のように宣言する。

我々はたいていの場合ヨーロッパに影響を与えてきましたが、我々にはこの種もの〔民謡集〕で諸外国に対抗できるものは二つしかありません〔第二版では「何もありません」に変更〕。(中略) 私はフランスの諸地方の一つに対して、今、指摘したばかりの欠如を埋めようと努力しました。(La Villemarqué 1839 : i-ii)

こうしたラヴィルマルケの作品に対する意気込みを見る限り、ブルターニュの民謡をフランスの文学界に紹介するという彼の大望を約束してくれるはずのものが、『バルザス＝ブレイス』であったことは想像に難くない。

出版に先立ち、ラヴィルマルケは歴史家のオーギュスタン・ティエリ (1795-1856) やロマン派の代表的詩人ラマルティエヌ (1790-1869) など旧知の著名人に、『バルザス＝ブレイス』の詩篇のいくつかを送っていた。この事実からも若きラヴィルマルケの作品に対する、並々ならぬ熱意を窺い知ることができる。そして以下に挙げるラマルティエヌの返事は、ラヴィルマルケ青年に『バルザス＝ブレイス』の成功を予感させるものであったに違いない。

あなたがお送りくださった、あの気取りのなさど気品に満ちた詩篇をとでも興味深く拝読しました。私は、15世紀のブルターニュの詩人の独創的な表現をとでも好ましく思います。それを『ジョスラン』を読みながらお考えになったあなたにお礼を申します。あなたはこの時代の詩人たちの天真爛漫さをこの上もなく見事にとどめています。これは今日では極めて稀有な才能であり、この才能はいくら賞賛してもしすぎることはないでしょう… (La Villemarqué, Pierre 1926 : 27)

2 『バルザス＝ブレイス』の文学的成功

『バルザス＝ブレイス』は出版されるとまもなく、文学においてもケルト研究の分野においても熱狂的に迎え入れられた。オーデルン・ケルドレルは

1896年、ラヴィルマルケの死後、「『バルザス＝ブレイス』が出版された時、皆が驚き歓喜の嵐が巻き起った」(Cavalier 1900:6)と、その時の興奮を語った。オーギュスタン・ティエリ、クロード・フォーリエル (1772-1844)、ジャン＝ジャック・アンペール (1800-1864) など、当時の最も高名な著述家たちもこぞってこの作品に賛辞を惜しまなかった (Cavalier 1900 : 6)。なかでもジョルジュ・サンドは、そのエッセイ作品『田舎の夜の幻影』(1854)¹⁵の中で、『バルザス＝ブレイス』をホメロスの『イリアス』をも凌駕する詩編であると絶賛した。

ブルターニュについて話をしましょう。でもブルターニュがフランスになったのは、それほど昔のことではありません。ラヴィルマルケ氏が採集し翻訳した『バルザス＝ブレイス』を読んだ人は誰でも、必ずや私と同じように確信されるでしょう。つまり私の言うことを心の底から納得されるでしょう。「ノミノエの貢ぎ物」は140行の詩篇ですが『イリアス』を凌駕し、人間の想像力が生み出したいかなる傑作よりも完璧かつ美しく、完全なものです。

(Sand 1980 : 206)

一方で、こうした評価をそのまま鵜呑みにすることはできない。というのも当時のフランスは民謡や民話の収集、さらにはその研究において諸外国に大きく遅れを取っており、民謡を文学作品として積極的に評価しようとする動きも、それを正当に評価できる土壌もまだ整っていなかったからである。『バルザス＝ブレイス』が当時の文学界に受け入れられたのは、前述したようにロマン主義の時代にあって、この作品がブルターニュという「異国」を体現するもの、つまり「異国情緒」や「古代への憧憬」といったロマン派の求める感性に合致するものだった、という点を考慮に入れる必要があるからである。これがフランスの古歌だったら、このように熱狂的に迎え入れられたかは定かではない。

『バルザス＝ブレイス』がこうした幸運な巡り合わせによって、文学の世界で評価を得たことにより、いわばこの作品が契機となって、遅ればせながらフランスにも民謡収集の波が訪れる。やがてそこからフランス民俗学が誕生するのであるが、皮肉なことに民謡収集が学問の一つになっていく過程で、ラ

ヴィルマルケの収集方法や民謡の扱い方に対して疑義が唱えられるようになる。そして採集された民謡の「真贋」をめぐる、つまり『バルザス＝ブレイス』の詩歌が真正の「採話」なのか、あるいはラヴィルマルケの「創作」なのかという点をめぐって、「バルザス＝ブレイス論争」が引き起こされたのである。

V. 「バルザス＝ブレイス論争」とその後

1. 「バルザス＝ブレイス論争」の争点

最初の疑義が表明されたのは、『バルザス＝ブレイス』の第三版が出版された1867年であった。この年の10月16日、ちょうどサン・ブリューで開催された「国際ケルト学会」の初日に、フィニステール県の文書管理官であったルネ＝フランソワ・ルメン（生没年不詳）によって縮約版の『カトリコン』（1867）が再版された。『カトリコン』（1499）とは、15世紀末にトレギエの司祭ジェアン・ラガドゥック（生没年不詳）によって編纂されたブルトン語・フランス語・ラテン語の三言語の辞典である。ルメンはその「前書き」で、『バルザス＝ブレイス』が「贋作」であると言って公然とラヴィルマルケを非難した。

『バルザス＝ブレイス』の成功が最上の榮譽を与えるのは、著者の想像力に対してであり、そこには文学的に見ても歴史学的に見ても、僅かの真実もない。というのも、それ〔『バルザス＝ブレイス』〕を構成する一つ一つの作品、つまりグゥエンフランヤイスの町、ガリアのワイン、アーサー、レス＝ブレイスやノミノエ等々に関するものは、ド・ラヴィルマルケ氏の創作の才の賜物とみなされるからである。（中略）想像が越えてはいけない限界がある。あなたが楽しいなら、バルドや大バルド、ドルイドとさえも興じるがいい。だがあなたの捏造で歴史を歪ようとしてはいけない。真実は遅かれ早かれ明らかになるだろう。その時、あなたの不誠実な試みによってあなたに残るのは、軽蔑だけだ。（Le Men 1867 : 6-8）

ルメンの非難を皮切りに、ラヴィルマルケの晩年まで続く、いわゆる「バルザス＝ブレイス論争」の火蓋が切って落とされた。当初、論争はいくつかの

学術誌が掲載していただけだったが、1872年には新聞までも巻き込む一大論争へと拡大していった（Laurent 1989 : 23）。

この論争の急先鋒となったのが、フランソワ＝マリ・リュゼル（1821-1895）である。リュゼルは20年以上にわたって、トレギエ地域の民謡や民間伝承の採集に携わってきた在野の研究者である。彼は、1872年7月にサン＝ブリューで開催された学術会議で、「ラヴィルマルケ氏の『バルザス＝ブレイス』の民謡の信憑性について」と題する発表を行ったが、この学術会議に先立ち、ラヴィルマルケに問題点や疑義を指摘した質問状を送っていた。しかし、それに対してラヴィルマルケから回答が寄せられることはなかった。のみならず、あろうことかラヴィルマルケは当初予定していた学会の参加までも取りやめてしまったのである。ラヴィルマルケは、その後もこの論争に対して口をつぐみ、採集ノートも生涯、公開することはなかった。彼のこうした消極的な態度が、結果的に「バルザス＝ブレイス論争」を長引かせることになる。

学会の翌月早々に、リュゼルは発表内容を『ラヴィルマルケ氏の「バルザス＝ブレイス」の民謡の信憑性について』と題する小冊子にまとめて、出版した。これに拠ると、リュゼルの批判の要点は大きく二つに分けられる。一つは、実証的な分析の欠如であり、もう一つは採集した民謡への加筆修正である。リュゼルは自らの主張を証明するために、『バルザス＝ブレイス』第三版の「前書き」の記述を検証して、問題点を一つ一つ指摘している。以下にその主張を追ってみよう。

『バルザス＝ブレイス』の作者がブルターニュ文学に貢献したことは、まぎれもない事実で反論の余地がないことを認識し、その学識、審美眼、想像力を認めた上で、私はその作品における考証の欠如を非難する。（Luzel 1872 : Avant-propos ii）

また、ラヴィルマルケが『バルザス＝ブレイス』を「真に文学的かつ哲学的な関心に値するものにする」（1963 : iv）と宣言したことに対して、次のように反論している。

事実、「文学的かつ哲学的」ということのみが

問題となっているなら、『バルザス＝ブレイス』という魅力的な書物に対して何も言うことはない。しかし周知の通り、作品全体を通して著者の本当の関心事はそれ〔『バルザス＝ブレイス』〕を構成する一つ一つの作品の古さや歴史のかつ文献学的な特徴にあり、そこにこそすべての問題がある。(Luzel 1872: 18)

あるいは、「裁量と選択は、文学における楽しみの一つだというある先生の意見を思い出して、厳しくしすぎたり、大きな制約をわが身に課したりすることを案じたりはしなかった」(1963:v)というラヴィルマルケの言葉に対して、リュゼルは「『文学』としてならば良い。しかし、何よりも歴史学や文献学に関することであれば、このようなゆき過ぎた裁量は認められない」(Luzel 1872: 22)と厳しく指摘している。さらに、ラヴィルマルケの作品の作り方についても批判する。

彼〔ラヴィルマルケ氏〕がメモを集めてしまうと、碩学の仕事に代わって詩人の仕事がやってくる。そして彼はこれらの美しい、とても詩的でとても規則正しい、極めて完成度の高い、概してとても洗練された趣味の物語詩、そしてとても高尚な雰囲気、文明化の途上にある時代にしては高尚すぎる雰囲気パレードの物語詩を作ったのだ。(Luzel 1872: 25)

以上、リュゼルが公開で行った非難のいくつかを紹介したが、これらの言説から分かることは、彼が問題にしたのはなによりもラヴィルマルケの学問的な態度だったということである。

『バルザス＝ブレイス』の初版が刊行された当時から30年近くが経ち、この間、歴史学や文献学の分野で批判的研究が飛躍的に進んだ。物の見方もかつてと同じではなく、採集されたテキストの作成方法もずっと厳しくなっていた(Laurent 1989: 12)。『バルザス＝ブレイス』には民謡の採集場所、採集日時、採集者、語り手の氏名や職業などの基本的な情報が記載されておらず、民謡それ自体も一言一句違わずに記録されていたわけではなかった。「バルザス＝ブレイス論争」が引き起こされた当時、つまりラヴィルマルケが第三版を刊行した頃から、民謡や民話は新たな学問分野として確立した民俗学の観点から扱

われることが常識になりつつあった。こうした学問における変化にもかかわらず、ラヴィルマルケが歴史学や民俗学にふさわしい方法で民謡に考証を加えなかった、あるいは研究を行わなかったことに対して、リュゼルは非難しているのである。こうした考え方は、彼の次の言葉からも明らかである。

1839年、『バルザス＝ブレイス』が初めて出版された当時、民謡学は揺籃期にあったが、今日〔1872年〕では真の学問になった。(中略)後に続く版、とりわけ1867年の最新版については、ラヴィルマルケ氏がフランス学士院の会員である以上、その民謡集にしかるべき考証を行わなかった、あるいは少なくともほとんど行わなかったという点について、我々は氏に対していくらか厳しい態度をとらなければならないだろう。(Luzel 1872: 14)

ラヴィルマルケは、1858年にフランス学士院の碑文・文芸アカデミーの会員に選出されることで、民間伝承の分野で第一級の学者として周囲に認められていた。リュゼルが非難しているのは、ラヴィルマルケがフランス学士院の会員でありながら、学問的な要請に従っていなかったことである。

2. 19世紀における民衆歌の位置づけ

しかしながら、「バルザス＝ブレイス論争」に関わる言説を読むと、一つの疑問が浮かび上がる。それは『バルザス＝ブレイス』を偽書とする立場を取る者たちは、リュゼルを筆頭に誰もこの作品を文学作品として論じなかったことである。

前述したリュゼルの言説を再び見てみよう。「『バルザス＝ブレイス』の作者がブルターニュ文学に貢献したことは、まぎれもない事実で反論の余地がないことを認識し、その学識、審美眼、想像力を認める」と断言した上で、「『文学のかつ哲学的』ということのみが問題となっているなら、『バルザス＝ブレイス』という魅力的な書物に対して何も言うことはない」と述べている。あるいは、「『文学として』ならば良い」という言葉も見られた。さらには、「『バルザス＝ブレイス』の初版は、ラヴィルマルケ氏が作ったもの、つまり文学でありブルターニュのものでなくてはならなかった」(Luzel 1872: 14)と言って、かつて初版が文学作品として扱われていた事実を正

当に評価しているのである。つまりリュゼルは、「論争」において一貫して歴史学、文献学、民俗学の観点から『バルザス＝ブレイス』を「偽書」だと論じているが、それはあくまで第三版に対する批判なのである。

つまるところ、「バルザス＝ブレイス論争」の争点は、この作品、とりわけ第三版が「文学」なのかそうでないのか、というただその一点に集約されると言っても過言ではない。ではなぜ第三版だけが争点となったのだろうか。この疑問については、二つの点から考察を進める必要がある。一つは民謡や民間伝承をめぐる学問的な変化とそれに対するラヴィルマルケ自身の両義的な態度であり、もう一つは当時の文学における民謡の位置づけや評価の問題である。

そもそもラヴィルマルケが『バルザス＝ブレイス』の初版を刊行した当時、リュゼルも指摘しているが、民謡学は揺籃期にあったのである。学問の領域も現代のように分野ごとにはっきりと分かれてはいなかった。したがって、この種の作品は詩の領域で扱われていた。だからこそリュゼルは「初版は文学でなくてはならなかった」と言っているのである。ラヴィルマルケ自身もこの点を意識しており、作品を文学世界に向けて発表するには、文学的なフランス語訳、リュゼルに言わせると「詩的でとても規則正しい、極めて完成度の高い、概してとても洗練された趣味の」フランス語訳が必要だと考えていた。そのため、ラヴィルマルケは初版及び第二版の「前書き」で、「可能な限り文学的な翻訳を、散文でテキストの対訳につけた」(La Villemarqué 1839 : v, 1846 : ix) と述べているのである。

さらに、リュゼルの批判を招いた「この民謡集を真に文学的かつ哲学的な関心に値するものにする」という文言は、初版から一貫して「前書き」に記された言葉であるが、当時のラヴィルマルケ青年の文学的野心を考えると、シャトーブリアンやラマルティエヌ、そして当時寄稿していた『エコー・ド・ラ・ジュヌス・フランス』誌に集うロマン派の詩人や作家たちを意識して、フランス文学界に向けて発せられた言葉であると考えられる。

その一方でリュゼルが糾弾しているように、ラヴィルマルケはどの版においても、『バルザス＝ブレイス』の歌が「本物である」と主張している。とりわけ初版と第二版では、「バルザス＝ブレイス」

というタイトルそれ自体が「歴史、神話、習俗、信仰、感情、個人や家族、民族を包含する一つのブルターニュの詩史」(La Villemarqué 1839 : ii) であると自負している。つまり、この民謡集が民衆の詩歌の歴史を解明する作品である、とその歴史学的な側面を強調しつつ、作品の真実性を担保しようとしているのである。歌の真実性へのこのこだわりは、疑義が持ち出された当初において彼が発した数少ない抗弁にも見られる。それは、サン・ブリューで1867年10月に開催された「国際ケルト学会」にあてて、ラヴィルマルケが自分の学問的立場を明らかにした時の文言であるが、そこでやはり「真実」という言葉を口にしている。

多様なテキストを前に誠実に、真摯に歴史的、文献学的真実を探し求めた、ということ以外、私には言うことも付け加えることもありません。(Laurent 1989 : 24)

この真実性へのこだわりは、裏を返せばラヴィルマルケにとっては『バルザス＝ブレイス』が「創作」ではないという主張である。採録された民謡の数が増えたという点を除いて、初版から第三版まで一貫して、『バルザス＝ブレイス』のコンセプトは変わっていない。彼にとって作品がどの学問領域に属するかということは、大した問題ではなかった。それゆえにこそ、彼の言説は、ある時はこの作品を文学や哲学の書として扱い、またある時は歴史学、文献学の史料として誇示する、というように二転三転するのである。

しかしながら、初版からわずか30年の間に『バルザス＝ブレイス』を取り巻く状況が大きく変わってしまった。その結果、この作品は創作性・創造性に価値を置く「文学」と、実証と客観的事実を積み重ねる「歴史学、文献学、民俗学」という両極に位置する領域のはざまに落ち込んでしまったのである。残念なことに、ラヴィルマルケはこの学問的な変化に無頓着であった。彼の認識では、採集した詩歌に文学的な修正を加えたとしても、その修正は「創作」というほどのものではなく、また詩歌を恣意的に編集したとしても、それが「一次史料」としての民衆詩の価値を損なうことになるとは考えなかったのである。1867年当時の学問的状況を考慮すると、文学であって同時に歴史学、文献学である作品一線り

返すが、ラヴィルマルケにとっては必ずしも矛盾ではなかった—は、論争の渦中であって、誰からも理解されなかったに違いない。だからこそラヴィルマルケは論争に対して、沈黙を守らざるを得なかったのではないだろうか。

さらに、当時のラヴィルマルケの立場も考慮する必要がある。彼は『バルザス＝ブレイス』の成功以来、フランス及びヨーロッパの学术界で一目置かれる存在となっていた。1846年のレジオンドヌール勲章の受章に続き、1851年にヤーコブ・グリムの推薦によってベルリン・ロイヤル・アカデミーの通信会員に選出された。さらに1858年には、前述のフランス学士院の会員に選出されている。

ドナシアン・ローラン（1989：12）も指摘しているように、栄光に包まれていたラヴィルマルケがブルターニュの民衆歌を「原初の純粋さのうちに再興した」という自負心を抱きながら、歴史的な整合性や史料が失われた民間伝承の欠落を埋め、手直しをして出版したとどうして認められるだろうか。ブルターニュの民衆に尊厳を取り戻し、中央の文芸から軽蔑されていたその言語や文学にフランス文学も及ばない「古さ」という優位性を与えたと評価された作品の中に、どうして自分の創作が入っていると告白できるだろうか。こうした事情から、彼は採集した詩歌に修正を施したと認めることができなかった。

ではなぜラヴィルマルケは、学者としての名声を得ることになったのだろうか。フランス学士院の会員への選出を含め、この点についてはラヴィルマルケと歴史家オーギュスタン・ティエリとの関係を考慮する必要があるので稿を改めるが、ベルナル・タンギョ（1989：54）は、若きラヴィルマルケはブルターニュの歴史に関してティエリの学術アドバイザーの役割を果たしていたと報告している。

さて、ここで改めて指摘しておきたいのが、『バルザス＝ブレイス』が当初、文学作品として成功を収めたという点である。学問的な変化があったとはいえ、『バルザス＝ブレイス』それ自体はフランス文学として評価され続けるべきではなかったのか。なぜ文学的な関心までも薄れてしまったのだろうか。この点を解明するには、当時のフランス文学における民謡の位置づけについて考察する必要がある。「バルザス＝ブレイス論争」が始まった時、ロマン主義はすでに終わりを告げていた。そして新たに写実主義や自然主義が台頭していた。つまり、ロマン主義

とともにクローズアップされた「麗しきブルターニュ」やこの土地の素朴な民衆詩は、すでに人々の関心を失っていたのである。

しかもフランス文学においては、そもそも民謡や民謡などの民間伝承の価値は決して高いとは言えなかった。当時の認識では、民間伝承の類いは文学が重視する創作性を内包していないばかりか、農村の人々の話し言葉からくる粗雑さや民謡の不完全な押韻、時代遅れの表現があるなどの理由から、正統な文学作品とは認められていなかったのである。この点について、民謡の文学的な価値に注目し、自らその収集と発表を行っていた詩人ジェラルム・ド・ネルヴァル（1808-1855）は、1842年には早くも当時の文学界の民謡に対する無理解を嘆いている。

書くよりも先に、各民族は歌った。あらゆる詩はこれらの素朴な源泉から靈感を得ているのであり、スペインやドイツやイギリスが自慢げにそれぞれの国の物語歌謡集を引き合いに出す。それなのに、どうしてフランスには自国のものがないのだろうか。ブルターニュの哀歌、ブルゴーニュやピカルディの降誕祭歌、ガスコニュの輪踊り歌があるではないかと言われるかもしれない。しかし、本当のフランス語が常に話されてきた古い諸地方の歌は、一つも保存されてこなかった。というのも脚韻や韻律法、あるいは構文法を気にせずに作られた詩篇が書物の中に収められるのを誰も認めようとしなかったからだ。（Nerval 1989：754）

ネルヴァルは、別の作品でも批判を展開している。

いったい、我が民衆に真の詩情や理想に対するメランコリックな渴望が欠けていて、ドイツやイギリスの民謡と比較されるに値する歌を理解したり、生み出したりすることができないなどということがあるだろうか。もちろん、そんなことはない。フランスでは、文学がついそ一度も一般大衆の水準まで下りたためしがない、という事情があるのだ。17世紀や18世紀のアカデミー派の詩人たちが、こうした詩興を理解しなかったのは、農民らがそれらの詩人たちの、色彩に著しく乏しく、堅苦しいばかりの頌歌や書簡詩、短詩に感心しなかったのと同様だろう。

(Nerval 1993 : 571)

以上のネルヴァルの言説から、フランス文学史においてはロマン主義運動が展開された一時期を除き、民謡や民間伝承など地域に根ざした地方文学や民衆文学が正当に評価されない風潮が存在したことが分かる。

こうした風潮と相俟って、『バルザス＝ブレイス』はロマン主義の終焉と写実主義や科学的実証主義の隆盛という文学の潮流の変化とともに、その当時、新たに誕生した民俗学の領域で扱われるようになったのである。その結果、ラヴィルマルケの民謡の採集方法や扱い方に疑義が生じ、「バルザス＝ブレイス論争」を招く事態になったのは、前述した通りである。

VI. おわりに

以上、本論文では『バルザス＝ブレイス』の受容の問題を、18世紀後半から19世紀の文学的潮流や「バルザス＝ブレイス論争」の争点、そして『バルザス＝ブレイス』の評価の変遷を通して概観し、当時の文学と民謡の関係について考察した。

フランスの文学世界は他のヨーロッパ諸国のそれとは異なり、ロマン主義の成立において民謡や民間伝承の影響が限定的であり、ロマン主義が退潮するとその価値が相対的に低くなっていったという事情がある。さらに、これまでフランス文学史においては、プロヴァンス文学を除いて、地方の文学が言及されることはほとんどなく、また「再話文学」（民間伝承を再話することで創作された文学）という概念も存在しなかった。それゆえに、『バルザス＝ブレイス』や同時代の「再話作品」のもつ極めて繊細な叙情性や感受性は、文学の中に確たる居場所を見出せず今日に至っている。そのため『バルザス＝ブレイス』の叙情性もまた、フランス文学史において長い間、正当な評価を得ることはなかった。

しかしながら、この民謡集は文学の領域においても決して過小評価されるべきではない。これまで言及されることはほとんどなかったが、『バルザス＝ブレイス』がブルターニュのみならず、フランスの多くの作家に影響を与えたことはまぎれもない事実であり、ラヴィルマルケが「ブルターニュ・ロマン主義の父」（Herrieu 1943 : 42）だと評価されている

のも決して大げさではない。「論争」の急先鋒であったリュゼルはもちろんのこと、オーギュスト・ブリズーやアナトール・ルブラース（1859-1926）、あるいはポール・セビヨ（1843-1918）、パリの文学界ではジョルジュ・サンド、ジェラール・ド・ネルヴァル、ギー・ド・モーパッサン（1850-1893）¹⁶らに影響を与え、散文の「再話作品」の成立にも大きく貢献した。

しかしながら、その再評価はいまだ十分に進んでいるとは言い難い。今後の研究においては、『バルザス＝ブレイス』の影響を受けて生まれた文学作品を新たに「再話作品」として捉え直し、フランス文学の中に位置づけるとともに、その系譜を明らかにすることを目指したい。

付記

本論文は、平成27年度～29年度科学研究費助成金（基盤研究（C））「フランスにおける再話文学の系譜—『バルザス＝ブレイス』を中心として」（課題番号15K02383）の研究成果の一部である。

注

- 1 ドナシアン・ローラン（1989:5）の研究によると、英語版及びドイツ語版は1841年、ポーランド語版が1842年に翻訳出版されている。その後、時を経てオランダ語やスペイン語にも翻訳され、いずれの言語においても複数回、翻訳書が出版されている。
- 2 1760年に最初期の作品『古詩断章』が出版され、その後『フィンガル』と『テモラ』が発表された。1765年になって、改訂版として『古詩断章』の一部と『フィンガル』『テモラ』を合わせたものが『オシアン』のタイトルで出版される。さらに、1773年に『オシアン』の英訳文の見直しが行われ、新たにタイトルを『オシアン』に変えて出版され、これが著者生前の決定版となった。本稿では、これらの「オシアン作品群」を『オシアン』と表記する。
- 3 ゲーテは『オシアン』の一部を翻訳して小説『若きウェルテルの悩み』に取り入れ、ゲーテの友人でもあったヘルダーは「シトゥルム・ウント・ドラック（疾風怒濤）」運動の初期に小論『オシアン論』を書いている。
- 4 神話・伝説や歴史上の人物など、ある共通の人物にまつわる話を集めた物語群のこと。
- 5 フランスでは、『オシアン』の真贋論争は大きな話題に

はならなかった。この当時、民俗学もその学問的な手法も確立してはおらず、古歌、民間伝承の採集に対する関心も低かったということが、その理由の一つとして挙げられる。

- 6 ウェルギリウス (BC70-BC19) やアリストテレス (BC384-BC322)、タッソ (1544-1595) を好んだヴォルテールは、論説集 *Questions sur l'Encyclopédie* の中で自らをフィレンツェの文人に仮託して次のように『フィンガル』を批判している。「フィレンツェ人は医者が朗唱した賛歌の数節とスコットランド人ががなり立てた『フィンガル』の最初の詩句を注意深く聞いて、こうした大仰で誇張した人物像のすべてにそれほど感動はしない、ウェルギリウスの控えめで高尚な文体の方がずっと好ましいとその本心を明かした。」(Voltaire 1770: 299-300)
- 7 本引用のデプレオーは、詩人・批評家のニコラ・ボワロー (1636-1711) の異名で、フランスにおける古典主義理論の確立者として知られている。
- 8 『オシアン』を手にとった文人、知識人はデイドロ、スエール、メルシエ、レチフ・ド・ラ・ブルトンス、スタール夫人、シャトープリアン、ナポレオンなど枚挙に暇がない。
- 9 フランス革命期のブルターニュでは、「ふくろう党の乱」と呼ばれる反革命の乱が起こった。この反乱を題材にした作品がいくつか生まれたが、その最も有名なものの一つがバルザックの『ふくろう党』(1829年)である。
- 10 エミール・スーヴェストル (1866: 5) は、その著作『最後のブルターニュ人』の序文に、「ブルターニュはもてはやされるようになり、人々は自らお金を払って〔ブルターニュを題材とした〕小説を書き、〔ブルターニュに〕旅行をする。〔ブルターニュを対象に〕統計を取り考古学の研究をし、文学や地理学の記事を書くようになった(中略)」と記している。
- 11 1839年と1845年の版では、左ページにブルトン語の民謡、右ページにフランス語の対訳が添えられた2巻本であった。1867年の版ではブルトン語のページはなくなり、ブルトン語はフランス語のページの下部に脚注の形で添えられ1巻本にまとめられた。なお、収録された詩歌の数は版を重ねるごとに増えており、1839年の版では54編、1845年の版では86編、1867年の版では88編である。
- 12 ラヴィルマルケは、1835年にはすでに最初の記事を寄稿している (La Villemarqué, Pierre 1926: 21)。
- 13 創刊当初は月二回の発行であったが、後に月一回となる。最盛期には15,000部の発行部数を誇った。
- 14 ブルターニュ出身の上院議員であり、また「ブルターニュ協会」の会長であったオーデルン・ケルドレルは、ラヴィルマルケの死後にサン・ブリューで開催された学術会議 (1896年6月21日開催) の開会の挨拶で、ラヴィルマルケに対

する追悼の辞を述べた。その中で、若きラヴィルマルケがいかに文学を愛したかを次のように語った。「とりわけ文学がラヴィルマルケを魅了した。そして文学の分野でもすでに彼の好みはブルターニュ文学、ウェールズの詩、アルモリカの民謡にあった。」(La Villemarqué, Pierre 1926: 20)

- 15 『田舎の夜の幻影』は後に他のエッセイとまとめられて、1859年に『村の散策』のタイトルで刊行された。
- 16 一般にあまり知られていないが、ギー・ド・モーパッサンは1883年に、『ル・ゴーロワ』誌に「イスの都の伝説」を発表している。

参考文献

- Cavalier, Auguste (1900), « Hersart de la Villemarqué », *Les Contemporains*, n° 422, Paris.
- Constantine, Mary-Ann (2004), « Ossian in Wales and Brittany », *The Reception of Ossian in Europe*, edited by Howard Gaskill, London, New York, Continuum.
- Europe. *Revue littéraire mensuelle. Littérature de la Bretagne*, n° 913, mai 2005.
- Gourvil, Francis (1960), *Théodore-Claude-Henri Hersart de La Villemarqué et le Barzaz-Breiz*, Imprimerie Oberthur, Rennes.
- Journal Encyclopédique*, le 1^{er} avril 1763, Bouillon, Imprimerie du Journal.
- Journal Etranger dédié à Monseigneur le Dauphin* par M. L'Abbé Arnaud, septembre 1760, Paris, Jacques-François Quillau.
- Herrieu, Loeiz (1943), *La littérature bretonne : depuis les origines jusqu'au XX^e siècle suivie d'extraits traduits des meilleurs auteurs*, Hennebont, Éditions de Dihunamb.
- Laurent, Donatien (1989), *Aux sources du Barzaz-Breiz. La mémoire d'un peuple*, Douarnenez, ArMen.
- Laurent, Donatien (1997), « Des antiquaires aux folkloristes : Découverte et promotion des littératures orales I. Le temps des précurseurs (1815-1870) », *Histoire littéraire et culturelle de la Bretagne : II Romantisme et littérature populaire*, Paris-Spezed, Champion-Coop Breizh.
- La Villemarqué, Théodore-Claude-Henri Hersart de (1837), « Les montagnes noires », *L'Écho de la Jeune France*, 1^{er} octobre 1837, Paris.
- La Villemarqué, Théodore-Claude-Henri Hersart de (1836), « Brizeux », *L'Écho de la Jeune France*, le 15 février 1836, Paris.

- La Villemarqué, Théodore-Claude-Henri Hersart de (1963), *Barzaz-Breiz. Chants populaires de la Bretagne*, Paris, Librairie Académique Pétrin.
- La Villemarqué, Théodore-Claude-Henri Hersart de (1839), *Barzaz-Breiz. Chants populaires de la Bretagne*, T. I, Paris, Delloye.
- La Villemarqué, Théodore-Claude-Henri Hersart de (1846), *Barzaz-Breiz. Chants populaires de la Bretagne*, T. I, Paris, A. Franck, Paris.
- La Villemarqué, Pierre Hersart de (1926), *La Villemarqué, sa vie et ses œuvres*, Paris, Honoré Champion.
- Le Guillou, Louis et Laurent, Donatien (1997), *Histoire littéraire et culturelle de la Bretagne : Il Romanticisme et littérature populaire*, Paris-Spezed, Champion-Coop Breizh.
- Le Men, René-François (1867), « Préface » du *Catholicon de Jehan Lagadeuc. Dictionnaire breton, français et latin* publié par R. F. Le Men, Lorient, Corfinat.
- Luzel, François-Marie (1872), *De l'authenticité des chants du Barzaz-Breiz de M. de La Villemarqué*, Saint-Brieuc, Guyon Francisque.
- Moore, Dafydd (2004), « The Reception of *The Poems of Ossian* in England and Scotland », *The Reception of Ossian in Europe*, edited by Howard Gaskill, London, New York, Continuum.
- Nerval, Gérard de (1989), « Les vieilles ballades françaises », article daté du 10 juillet 1842, *La Sylphide, Œuvres complètes*, T. I, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Éditions Gallimard.
- Nerval, Gérard de (1993), « Chansons et légendes du Valois » dans *Les Filles du Feu, Œuvres complètes*, T. III, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Éditions Gallimard.
- Postic, Fañch (2009), *Bretagnes. Du cœur aux lèvres*, Rennes, Presses universitaires de Rennes.
- Rousseau, Jean-Jacques (1964), *Julie ou la Nouvelle Héloïse, Œuvres complètes*, t. II, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Éditions Gallimard.
- Rudel, Yves-Marie (1950), *Panorama de la littérature bretonne : des origines à nos jours, écrivains de langue bretonne et de langue française*, Rennes, Imprimerie bretonne.
- Sand, George (1980), *Promenade autour d'un village, Œuvres complètes*, T. 28, Genève, Slatkine Reprints.
- Souvestre, Emile (1866), *Les Derniers Bretons*, T. I, Paris, Michel Lévy Frères.
- Tanguy, Bernard (1989), « Lettres inédites de Théodore Hersart de La Villemarqué à Augustin Thierry auteur d'une candidature à l'Institut », *Bretagne et romantisme. Mélanges offerts à Louis Le Guillou*, Université de Bretagne Occidentale, Centre d'étude des correspondances des XIX^e et XX^e siècles et CNRS, Bannalec.
- Van Tieghem, Paul (1917), *Ossian en France*, Paris, F. Rieder & Cie.
- Voltaire (1770), *Questions sur l'Encyclopédie par des amateurs*, Vol. I, Genève, Cramer.
- 秋山龍英 (1984) 「ネルヴァルとフランス民謡：フォークソング考 (II)」『研究紀要』9号、東京音楽大学。
- 大場静枝 (2016) 「語り継がれる民族の記憶—『バルザス = ブレイス』をめぐる—」『祈りと再生のコスモロジー』、成文堂。
- 片山麻美子 (2011) 「ジェイムズ・マクファーソンの『古詩断片集』覚書」『大阪経大論集』第62巻第3号、大阪経済大学。
- 小阪修 (1989) 「ネルヴァルと音楽」『広島大学フランス文学研究』8号、広島大学フランス文学研究会。
- 玉田敦子 (2010) 「18世紀における『オシアン』と崇高—文化的ナショナリズムの問題を中心に—」『ケルティック・フォーラム』13号、日本ケルト学会。
- 中央大学人文科学研究部編 (2001) 『ケルト復興』中央大学人文科学研究所研究叢書25、中央大学出版部。
- 原聖 (2007) 『ケルトの水脈』、講談社。
- 梁川英俊 (2001-2003) 「ブルターニュにおけるナショナリズムの誕生—『バルザス = ブレイス』以前のラヴィルマルケ」(1)~(4)『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』54~57号、鹿児島大学。
- 梁川英俊 (2003-2009) 「ラヴィルマルケとリュウゼル—いわゆる『バルザス = ブレイス論争』について」(1)~(8)『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』58~60、62、64~66、70号、鹿児島大学。
- 山内淳 (2016) 「ブルターニュの古謡集『バルザス = ブレイス』：魔術師マーリンの影」『日本大学芸術学部紀要』63号、日本大学芸術学部。
- 山内淳・小辻梅子 (2011) 『二つのケルト—その個性と普遍性』、世界思想社。